

試練を迎える国連
～安保理・総会における議論の観点から～

星野俊也

2022年6月11日

日本国際連合学会 第 23 回（2022年度）研究大会

試練を迎える国連：ロシアの暴挙に対して国連は「無力」なのか？

ロシアのウクライナ軍事侵攻を受けての3つの「戦い」(Battles)：

- 戦場 (battle space)：領域の獲得・奪還をめぐる軍事的な攻防戦
- ナラティブ空間 (info/cyber/narrative space)：メディア・SNS等における情報戦
- 「正当性空間」 (“legitimacy space”)：国連等の多国間会議体での価値の外交戦

国連における外交戦の「理不尽」：

国連安保理：ロシアの拒否権・中印UAEの棄権

- 常任理事国・議長国が侵略を断行
- 常任理事国・議長国が制裁（集団安全保障措置）を妨害
- 一部の非常任理事国の消極対応

⇒ ロシアの「暴挙」=究極の「利己主義」

⇒ 国連憲章秩序に根底から挑戦

拒否権は合法。ただし、濫用は問題

(1990年代以降、ロシア30回、米国19回、中国16回)



試練を迎える国連：ロシアの暴挙に対して国連は「無力」なのか？

「正当性空間」での外交戦：国連の取りうる制度・手続でロシア“孤立化・非正当化・弱体化”

- 国連安保理：手続事項で「平和結集(U4P)」・総会「緊急特別会合(ESS)」開催
 - 国連総会：ESSでロシア「侵略」断定・非難／拒否権に説明責任決議
 - 国連人権理事会：ロシア資格停止決議⇒「重大かつ組織的な人権侵害」非難
- その他、国際司法裁判所（仮保全措置）・国際刑事裁判所（戦争犯罪捜査）、等

⇒しかし、ロシアを止められていない「現実」も

朝日新聞 2022年3月4日 朝刊 7ページ 東京本社

考/論 安保理の限界逆手「孤立」醸成

星野俊也・大阪大院教授(国連代表部前次席常駐代表)

ロシアを包囲し、最大限の圧力をかける。そうした狙いを考えれば、制度や手続を駆使し、決議の文言調整まで、限られた時間で考えられることはやったと言える。満点に近い。決議の題も「ウクライナに対する侵略」と断じている。

安全保障理事会で否決された決議案は主文が11項目で、総会決議は16項目。ベラルーシに対する「遺憾」も加わった。それで、96カ国の共同提案国を集めた。ロシアの暴挙に対する強い憤りが感じられる。

今回の会合が国連総会の「緊急特別会合」であることも意義がある。安保理決議案でまず80カ国以上の共同提案国を集め、ロシアに公然と拒否権を使わせた。安保理の限界を逆手にとり、ロシアの非道をしつかりと印象づけた上で、総会に場を移した。3日間、「国際秩序を根底から揺るがす大問題だ」と、ロシアに非難を浴びせた。「ロシアは孤立無援」という空気を醸成した。あとは各国の個別対応になるが、この決議が一つのスタンダードになる。

国連には限界があるが、最大限の意思はロシアに伝えられたと言える。他方でこの際、安保理の根本改革に目を向けることも重要だろう。

(聞き手・藤原孝忠)

■国連総会での各国の投票行動
共同提案国(賛成)=96カ国
アフガニスタン、アルバニア、アンドラ、アンティグア・バーブーダ、アルゼンチン、豪州、オーストリア、パナマ、バルバドス、ベルギー

■国連総会のロシア非難決議
「ウクライナに対する侵略」(要旨)

ロシア非難 国連総会決議
▼1面参照

ANN NEWS Voting Result:

IN FAVOUR	141
AGAINST	5
ABSTENTION	35

ウクライナ国連大使
「この決議案が悪を止める障壁となる」
→141カ国の賛成多数で採択

試練を迎える国連：国連は「無力」なのか？…答えは「われら」次第

「正当性空間」での外交戦の課題：「制度」と「政治」のジレンマ…「われら」の「利己主義」

- よい表決・悪い表決（拒否権の濫用だけでなく、多数決の濫用＝「多数の横暴」も）
- 暴挙 vs 対処（介入・非介入）の「ダブル・スタンダード」（「宥和」的態度の存在）
 - 力による現状の一方的変更事案（ジョージア、クリミア、ウクライナ、…）に「われら」は？
 - 一線を越える人権侵害事案（含、「保護する責任」事案）（リビア、ミャンマー、…）に「われら」は？

⇒ 国際法・国連憲章の普遍性 vs 個々の政治事案の恣意性：ギャップは埋まるか

- 「われら」加盟国は、国際規範を（常に）遵守をしているか
- 「われら」加盟国は、国際規範違反に（常に）毅然と対処してきたか

↓↑

「われら」加盟国の「利己主義」の政治（一方的な暴挙と多国間主義への非協力の両面）

* 特に「暴挙」に対する国際社会の不対処・不処罰は、「次の暴挙」を誘発しかねないリスク

↓↑

一線を越えた暴挙は言語道断だが、対処・改革の欠如は制度の信頼性の喪失も

試練を迎える国連：国連外交は「無力」なのか？…答えは「われら」次第

より効果的な国連外交に向けて：

- 加盟国の権利と責任（政治的意思）の再認識・・・特に安保理常任理事国
- 不偏・中立の第三者としての国連事務総長の外交努力 または「誠実な仲介者」
- 国連総会（“よい”決議＝国際社会の総意）の意義の「過小評価」見直し
- 不可避の安保理改革…「アナクロニズム」是正・刷新による正当性強化の必要

「持続可能な平和と繁栄」に向けた国連外交への期待：加盟国の政治的意思の糾合

- 核軍縮（「脱核兵器」）含む軍縮アジェンダの実現
- 政治・安全保障超えた国連外交：SDGs（「脱分断」）、ネットゼロ（「脱炭素」）等
- 紛争予防のための相互理解促進（例：「敗者のノスタルジアと勝者の奢り」からの脱却）
- 「私たちの共通の課題」（2021年9月）

「人新世における新たな脅威と人間の安全保障」（2022年2月） } 「連帯」の推進

⇒ 「持続不能な未来」回避：より大きな共通目標のために「われらの利己主義」の自制できるか？・・・今は運命の分かれ道